

調 査 研 究 彙 報

建造物研究室

滋賀県下庭園の実測調査 1983年度から毎年継続して実施している県指定名勝庭園の実測調査であり、今年度は大津市の盛安寺庭園(342m²)と栗太郡栗東町の旧和中散本舗庭園(518m²)の2箇所で行った。等高線は、いずれも0.2m間隔とし、盛安寺は、縮尺100分の1、旧和中散本舗は50分の1平面図を作成した。1989年3月。(田中哲雄・高瀬・本中・小野)

三輪家住宅の調査 同家は、宮崎県日向市細島に所在する商家で、西南戦争の際、本営にあてられたと伝え、県の史跡に指定されている。現在の本屋は、家蔵文書から宝暦9年(1758)の建立と伝え、港町細島のなかでも年代の古さと規模の大きさでは群を抜いている。市の依頼により今後の保存のための基礎調査として行った。1989年3月。(細見・上野)

歴史研究室

南都諸大寺等所蔵典籍古文書の調査 興福寺(目録第2巻所収予定の第41~第60函分の補足調査、6・7月)、薬師寺(東京大学史料編纂所との共同調査、第16・22~24・26函、7月)、唐招提寺(長老収集追加品の調査、6・10月)、法隆寺(古文書イ函と陀羅尼の調査)、醍醐寺(古文書第13・14函の調査、8月。指定調査協力、6月)(加藤・綾村・橋本・寺崎・八幡)

その他の調査 水戸彰考館所蔵『僧綱補任』『僧綱補任抄本』の調査(1989年3月、加藤)、石山寺深密蔵の調査(1988年8月・12月、加藤・綾村・橋本・八幡)

平城宮跡発掘調査部

特別研究 平城宮跡朱雀門の工法に関する研究 2年度にわたった意匠と構造に関する研究に続くもので、今年度は、主として基礎工法の検討を行い、改訂設計案にもとづく全体加重の計算、構造補強案の作成、ベタ基礎による基礎部分の設計等をまとめた。また、遺構面と基礎ベース間の処理方法として版築による基盤形成が良いとされたところから、朱雀門西北隅で、7m²の広さで、手築きによる古代的版築実験を行った。なお、この実験地と朱雀門南方旧北新大池中の3箇所、及び実験地での版築上で2箇所、計5箇所で、載荷試験を実施し、それぞれ1m²あたり、7.5t、6.0t、5.0t、9.4t以上、9.4t以上、の長期許容支持力を得た。この結果、80cmの厚さに築き固めた版築上は、期待以上の地耐力をもつものであることが確認された。(細見・内田)

神野向遺跡の発掘調査 茨城県鹿島町所在の常陸国鹿島郡衙推定地の第8次調査。前年度に続き郡庁の外郭施設を検出するため計8本のトレンチを設定して調査した。その結果、南外郭は築地であることを再確認したが、北・東外郭施設は確認できなかった。北・東外郭とも郡庁からそれぞれ100m、150mに位置する現道路下にあるものと推測する。長期にわたった神野向遺跡の調査も今年度をもって終了した。1988年7月~12月。(毛利光・佐川・玉田)

石動山東林院庭園復原整備 石川県鹿島郡鹿島町に所在する石動山東林院庭園の復原整備について指導した。この庭園は、1987年度に発掘調査を行っており、その成果にもとづいて、今年

度は、池護岸石組、及び築山石組の修復を行い、山裾に掘られた井戸からの湧水を導入し、庭園としての形を整えた。1988年8月。(村岡・高瀬)

萩城東園地区整備のための基礎調査 山口県萩市の萩城指月山東麓の東園地区(面積約3ha)の整備基本構想立案を市教育委員会から依頼された。2箇年計画で立案することとし、初年度は、東園地区を含めた萩城全域の踏査及び史料、絵図、文献等の調査検討を行い、500分の1現況図に重ねて幕末における萩城の復原平面図を作り、これをコンピュータ・グラフィックスを用いて、復原パース図とした。次年度には、これらの資料をもとにして東園地区の整備基本構想を立案する予定である。(高瀬・本中)

飛鳥藤原宮跡発掘調査部

結城廃寺の発掘調査 茨城県結城市の結城廃寺第1次調査を市教育委員会が行うことになったので、これを指導した。今年度は最初の調査でもあるので推定寺域中心部にⅠ区、寺域西限を確認するためにⅡ区を設けた。その結果、Ⅰ区で回廊の西南隅を、Ⅱ区で西限とみられる南北溝を検出した。回廊は単廊で柱間寸法は桁行、梁行ともに3.6m等間。また回廊内側の瓦溜めから多数の埴仏や塑像が出土し注目された。1988年7月～10月。(大脇・深澤・岩永)

埋蔵文化財センター

来住廃寺の発掘調査 愛媛県松山市。従前、来住廃寺の西限と考えていた掘立柱回廊状遺構が、塔・講堂など伽藍中枢の西方で、方1町の別区画を構成することが明かとなる。昭和63年度には区画の南西隅・南東隅を確認し、昨年度検出した北面回廊状遺構と合わせて、その範囲が確定した。その年代も、7世紀中頃と、来住廃寺に先行することが明確になった。(上原)

小犬丸遺跡の発掘調査 本遺跡は兵庫県竜野市揖西町小犬丸に所在する。古瓦の出土例などから、古代山陽道の播磨国布勢駅家と推定されており、1982・86年の県教育委員会による道路拡幅などにもなう調査では、駅家推定地内や東隣接地で、掘立柱建物や道路とみられる遺構の一部、「驛」・「布勢」の8世紀代の墨書土器などが検出され、布勢駅家であることがほぼ確実になった。竜野市教育委員会では、1987年度から3箇年計画でこの重要遺跡の範囲確認調査を開始し、初年度の調査では、遺跡の西辺を画するとみられる溝、掘立柱建物や瓦溜などを検出した。第2年次にあたる本年度の調査では、駅家の実態を解明するとともに諸施設の広がりを確認する調査をすすめた。その結果、駅家の規模は方1町程度と推定され、遺跡西北部の調査区では礎石建物の東北隅部分を検出した。この建物は、西限溝との位置関係からみて南北棟または桁行3間程度の方形の建物と考えられ、北と東側に屋根瓦がずり落ちた状況などから寄棟ないし入母屋造と推定される。火災に遭った状況や立て替えかとみられる痕跡も見られた。軒瓦は、奈良末ないし平安初期とされている古大内式が主体をしめる。『日本後紀』大同元年条の史料などにより山陽道の駅家には瓦葺建物があつたと推定されてきたが、この建物を検出したことによってそれが裏付けられ、また駅家の中枢部分の構造を具体的に明らかにする糸口を得ることができた。1988年6月・1989年3月。(田中 琢・山中)